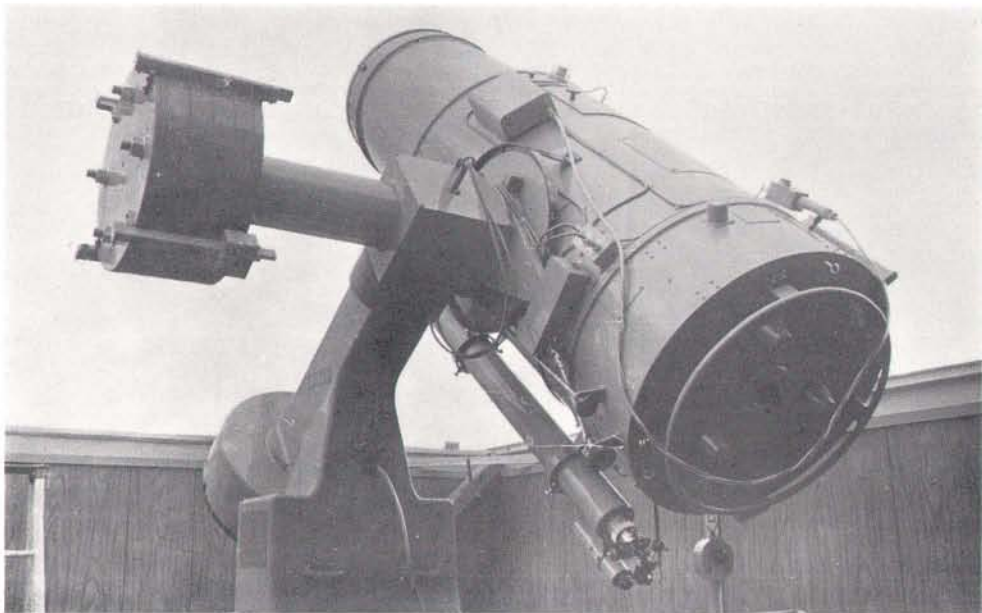
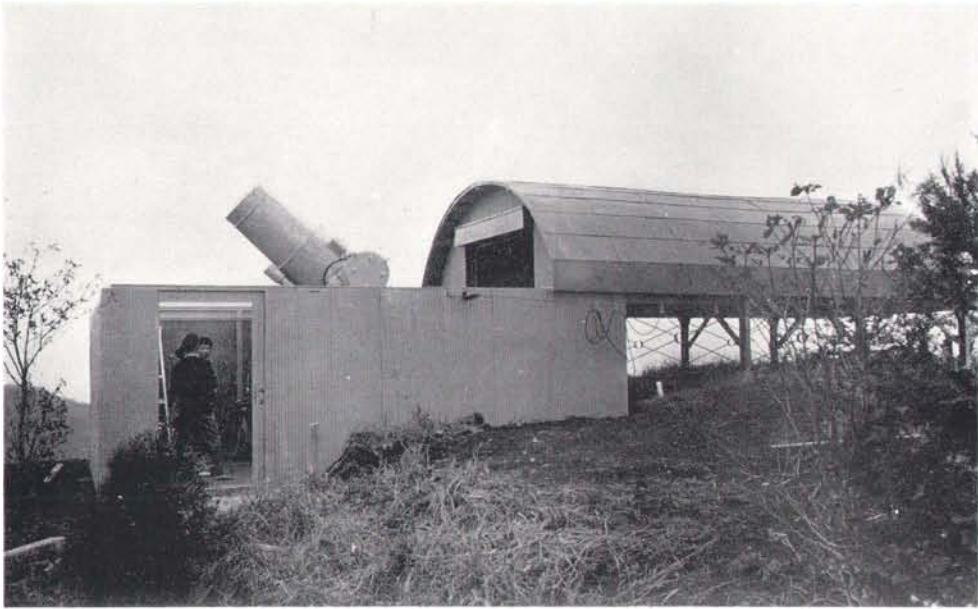
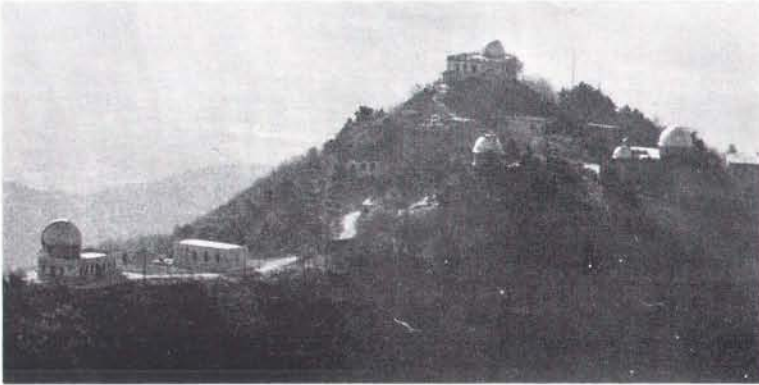


堂平の 50 cm 彗星写真儀

この器械は本誌第 57 巻 8 号表紙に日本光学の工場で組立中のものを紹介したことがある。昨年 8 月写真上のような仮格納室を堂平山頂の一等三角点の西南の突端に設けた。かまぼこ型の移動屋根式である。下はここに据付けられた彗星写真儀で、これはシュミットカメラタイプで、シュミット補正レンズの口径 50 cm、焦点距離 100 cm、F/2、写野は 6° の円形で画面サイズの直径は乾板では 10.5 cm、フィルムでは 9.6 cm である。案内望遠鏡は屈折式で、口径 10 cm、焦点距離 150 cm である。駆動は水晶発振器の 50 サイクルで同期電動機による。この器械は三鷹にあるブラッシャー天体写真儀の設備を更新したもので、従来ブラッシャーで行なっていた小惑星、彗星の写真観測を引継ぐのは勿論であるが、シュミットカメラとしての独自の観測分野も開拓する予定である。

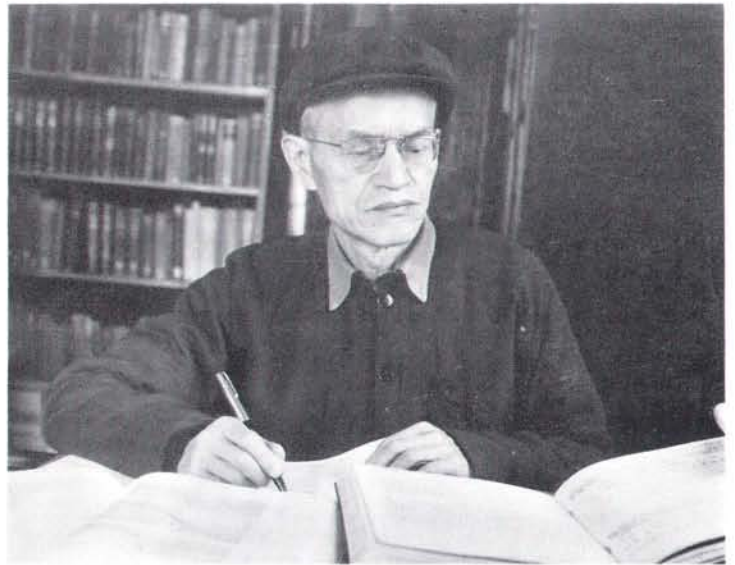


紫金山天文台の近況



紫金山(Tsuchinshan)天文台は南京の郊外にある。戦時に昆明に疎開した後、藪内清氏と渡辺敏夫氏が訪問されたことがあった。(科学技術史大系(14)349)

現台長張鈺哲(Chang Yu-che)氏、62才であるとのこと。

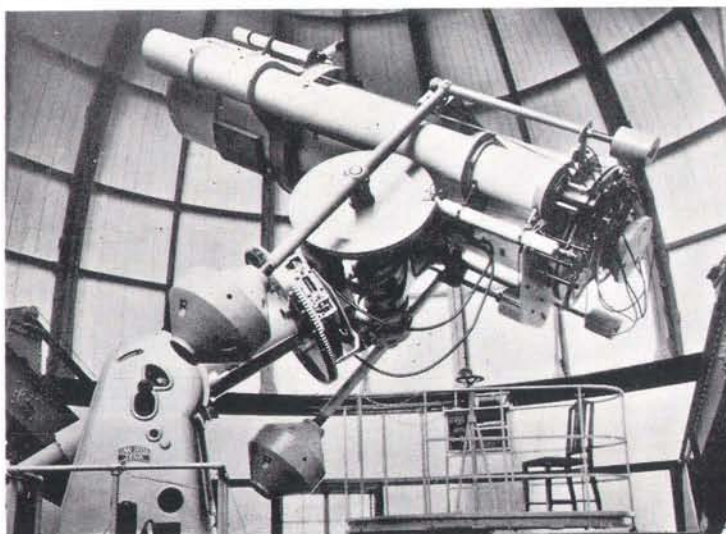


惑星研究部副部長の Chang Chia-hsiang 氏(右)、32才の新進天文学者である。桌上的計算機はフリーデンだ。



小惑星の位置を座標測定器で測定しているところ。

60 cm のツアイスの反射鏡。  
戦時中疎開していたものを修理して  
1954 年より使用している。



リョーの彩層望遠鏡、東京天文台のものによく似ている。